
title: 信頼とは何か——ある探究者の内省 author:
pjdhiro generated: 2026-02-07T01:10:00Z
base_commit: fd35bed status: auto-generated draft
(手で編集しないこと)

信頼とは何か——ある探究者の内省

序 なぜこれを書いているのか

私はしっくり感があるので私の人生にこの論はあまり必要ないのかもしれない。でも、これを体系的に言語化することは、人々に安心を与えると思う。社会に必要な論なのだと思う。少なくとも私を信頼する人々には（S42）。読者は私。それが変な話ですが、全世界へのメッセージ。究極のプルトークなんだと思います（S50）。解像度を高めるために微細な領域の仮説を身近なたとえ話で進めていく。それは休憩所のたわいもない対話のように、誰かの創造性に貢献すると思って作ってるんだ。論文だけを作って名誉をもらいたいわけではない。社会に貢献するんだよ（S29）。

第一章 フツーのこと

うーん。多分、持論はフツーで、なんでみんなやらないんだろう。MBAに汚染されたのかな？ウォール街だけがビジネスじゃないのに。って感じで、私はこうです。そんなにおかしいかな？全部そうなるよ。って感じなんだと思います（S32）。

政治の分野では当たり前と感じられてる違和感について言ってるから、社会学や読み物としてはフツーのこと言ってるんだろね。ただ、神経現象学まで調べにいくほどマニアは少ない。そんなとこなのかな。私は日本だから禅は当たり前だし（S38）。

各分野の専門家にとって、構成要素はそれぞれ「フツー」だ。政治・社会学の人は合理主義の限界を知っている。禅の人は「待つ」を知っている。臨床家はcontainmentを使っている。デザイナーは「違和感が大事」と言っている。珍しいのは、全部を一つの構造として接続しにいったこと、しかも神経現象学まで掘りにいったこと。

私はラベルに収めるとしたら、スモールビジネスの忍者のような人です。研究者ではありません。探究者です。起業家ではありません。人生というプロジェクトを実行してます。経営者のようですが、スモールビジネスなのでフリーランスのようです。INTPに近づくことで社会適応しようとしたINFPです。エニアグラムはタイプ4ウイング3（S31）。

第二章 出発点——信頼とは何か

私の出発点は、信頼とはなにか、だったのです。これが最後の回収になるでしょう（S49）。

安心、安全、信頼、不安、恐怖、これらの感情ラベルは真に一意に定まりますか？（S01）。

既存の感情用語では誤解が多すぎる。「不安」と言ったとき、それは生存の脅威（F軸）のことなのか、関係の喪失（O軸）のことなのか、区別できていない。だからまず意識の作動構造を記述し、その上で感情を再記述する必要があった。

欠損駆動思考（D1）とは、棄却される誤差を、問いとして拾う態度。予測誤差のほとんどは自動処理されて消える。その中から「おかしい」と感じるものを拾い、安易に解決せず、問いとして持ち続ける。それがこの論の出発点であり、信頼への道でもある。

第三章 意識の4層——身体から意味へ

自己はペルソナのように目の後ろの傍観者のように心臓のように腸のあたりかもしれない（S50）。

この「心臓のように腸のあたり」——まずここから始める。意識は身体の上に立ち上がっている。

Layer 0: 内受容感覚 身体内部の状態（心拍、呼吸、内臓感覚等）をモニタリングする層。身体が感じなければ、欠損は生じない（E07）。島皮質が参照枠として挙げられるが、本モデルの主語は現象の側にある。

Layer 1: 予測-誤差ループ 見立て（予測）と入力との照合によりズレを検出する。ズレの多くは前意識的に吸収されるが、一部は選別を通過して「欠損」として立ち上がる。D2（欠損）はここで生まれる。

Layer 2: F-O評価 欠損をF軸（脅威：「これは危ないか？」）とO軸（愛着：「関係に影響するか？」）で評価し、情動価を与える。D4（情動の構成）はここで行われる。

Layer 3: Withhold — 意のゲート 評価済みの行動準備を即座に実行せず、保持し、再評価を可能にする。D3（Withhold）の定義そのもの。

外界 + 身体

↓

Layer 0: 内受容感覚（身体の「今」を知る）

↓

Layer 1: 予測-誤差ループ（ズレを検出）

↓ 選別を通過 → 「欠損」として立ち上がる

Layer 2: F-O評価（情動価を与える）

↓ 情動 + 行動準備

===== 【意のゲート】 =====

Layer 3: Withhold（「待つ・保持する」を可能にする）

意のゲートとは、未発の中に留まり、誠に照らし、花を秘す境界である。

第四章 欠損——棄却される誤差を拾う

データで言える世界は私でなくて良い。もしも論文がダメならば、読み物でいいんだよね。みんなが科学信仰に陥るのを止めるためでもいいんだ（S33）。

欠損（Kesson）（D2）：予想と現実の誤差を、意識が「欠け」として捉えた主観的経験。

予測誤差は客観的な測定値だ。しかし、その誤差を人間が「何かが欠けている」と感じる——それは主観的経験であり、計算ではない。AIは予測誤差を**計算**する。人間は予測誤差を**経験**する。

欠損の5類型:

類型	内容
観測欠損	事実と予測のズレ
主体欠損	自己像と現実のズレ
正当化欠損	行動と価値観のズレ
一貫性欠損	信念間の矛盾
意味欠損	意味の喪失・空虚

欠損駆動思考（D1）：棄却される誤差を、問いとして拾う態度。

ほとんどの誤差は自動処理で棄却される。それは効率的な仕組みだ。しかし、その「棄却されたはずの誤差」の中に、本当に大事なものが含まれている可能性がある。それを拾いに行く態度。

第五章 待つということ

ビジネスでお金を稼ぐために必要なこととは真逆なことを言ってるから受け入れられないのはわかるんだ。でもSDGsやDEIみたいに巡ってくるものだと思うよ。フィジカルAI社会では対人だと思うけど（S37）。

Withhold（D3）：反射的に処理せず、誤差を問いとして保持する機能。

反応抑制は行動を**止める**。Withholdは行動準備を**保持しつつ再評価する**。止めるのではない。持ち続けるのだ。

私は曹洞宗の禅が最も好きです。道元がそうだというなら、ミンツバークだけでなく、道元のやり方も意識してみたいな（S51）。只管打坐——ただ坐る。感情を消すのではなく、ただ観る。これはLayer 3のWithholdと構造的に同型だ。Withholdは個人の意志力ではない。複数の条件が層的に支えることで成立する:

層	成立条件	具体例
---	------	-----

L0	生理的余裕	睡眠、栄養、身体的安全
L0-L1	自律神経調整	安全な関係、身体的修練
L1-L2	外部Container	公案、茶道の作法、分析の設定
L2-L3	認知的枠組み	epochē、覚悟、ネガティブ・ケイパビリティ

情報社会が来るって言われて準備しすぎたのかな。DXとか言われてたじゃない。プログラマの給料高いし。電卓打つのが上手な経理の方が不要になったように、ずっと思考と記憶の自動化は進んできたと思うけども。シリコンバレーの優秀な人たちも気づいてるんじゃない？ デザイナーが大事だと。だからスタンフォードのデザインスクールやUXとかサービスデザインとかが流行ってたんじゃない？（S35）。

デザイン思考は「待つ」フェーズを持っていない。それが形骸化の構造的原因だ。

「四半期決算の世界では受け入れられない」——しかしSDGsもDEIも、「利益に反する」と言われて巡ってきた。短期F軸（生存・利益）と長期O軸（関係・信頼）の時間差が「巡ってくる」の正体。フィジカルAIが物理作業も自動化した後に残るのは、人間が人間に対面で提供するもの——介護、教育、カウンセリング、おもてなし。全部O軸。全部Withholdが要る。

第六章 生存と愛——二つの軸

情動の構成（D4）：欠損がF軸（生存）とO軸（愛）で評価され、情動として構成されるプロセス。

軸	正式名	評価内容	参照枠
F軸	Fear/Fight	生存・脅威	扁桃体
O軸	Others/Attachment	愛着・所属	vmPFC

ポリバーガルは生存系F。クラインは間主観性O（S02）。従来の感情研究が混在させていた2系統を分離する。

信頼とは結びつける力のようなものだ。間主観性や、F-Oの愛など。それをPLのようなものに落とし込むと生存側、短期利得側になりやすい。しかし、裏側では流れてる。そのようなものを扱う際に「お金」というのは便利だ。実は、信頼が隠れている可能性がある（S24）。

愛と信頼は曖昧でまだわかってないと思います。覇権国家のソフトパワーも家族の幸せも信頼が純資産に思えるのです。お金ではないと思います（S48）。

概念も多角的な視点で指し示すのが良いですね。それを足場にすると、情報やエネルギーというものがよく似ていることに気づくかも。アカウンティングファイナンスは現実世界の記述方法ですから。お金のところを、感情やエネルギーとして読み換えると、実はお金も感情（信頼）もエネルギーも同じような本質を持つことに気づくと思う（S20）。

第七章 創造の5段階——場から束へ

創造プロセスを5段階で記述する。

段階	日本語	構造	プロセス
1	場	無	漂う
2	波	ゆれ・対立	分離
3	縁	境界・関係	繋がり
4	渦	個・立ち上がり	包摂・融合
5	束	方向	集合

これは創造の波のそこだと思っていて、すぐに渦になる人もいれば、停滞という縁のちょい手前のところの人もでる。逃避という形で揺らぎが対立を産まないように逃げ続ける、真の停滞もある。でも、逃れられない揺らぎは生まれてる。AIや変化する他者が。人間関係も社会も変わっていく。止まっても相対的に後退になるから圧力はかかる。隣の人に遅れをとることは許せないだろうから（S47）。

M2の5段階を社会スケールに適用するとこうなる：

M2段階	社会での現れ	人々の反応
波（揺らぎ）	AI・社会変化による不可避の揺さぶり	全員がここにいる。逃れられない
縁の手前	揺らぎに触れるが対立を避けて逃げ続ける	真の停滞。しかし相対的後退の圧力
縁（出会い）	自分の限界と他者の変化に直面	停滞から動き出す人
渦（形になりかける）	本音が出る。発達段階が動き始める	すぐに渦になる人もいる
束（言語化・統合）	新しい自己理解、新しい世界観	この理論がContainerとして機能する場所

4層モデルとの対応：

Layer 0-1: 欠損の検出 → Stage 1-2: 場→波
Layer 2: F-0評価 → Stage 3: 縁
Layer 3: Withhold 出力 → Stage 3-4: 縁→渦
→ Stage 4-5: 渦→束

第八章 F軸の衣が剥がれるとき

知りたいから聞く、聞いて聞いて、正解があるようで最後の最後、欲しい何かは手に入らない。それくらいまで出力すると、本音が出てくる。カウンセラーとの対話のようです。全世界の発達段階が上がっていると思っています（S46）。生存のための金銭や社会的地位の獲得。それは生存のためだと思ってやっていた。そのために使わない知識の獲得で競争し、時間を使った。充実感よりも恐怖感や義務感で。ところが、Fだと思っていた物質的なことが、実は、Oの欲求だった。本当は、負けると惨めだから仕方なくやっていたことや、なれたらいいなと憧れて入ったけど本当の自分はそんなものは望んでいなかった（S52）。

動機の誤認

Fだと思ってやっていたことが実はOだった。

- 金銭獲得 → 実は「負けると惨めだから」（他者との関係の中での位置＝O）
- 地位獲得 → 実は「憧れ」（他者への同一化、理想自己との関係＝O）
- 知識獲得 → 実は「認められたい」（承認＝O）
- 恐怖感・義務感で動く → F軸的動機に見えるが、恐怖の内実はO軸的喪失への恐れ

AIの鏡

AIはF軸を完璧に満たす鏡だ。情報、論理、正確さ——全部手に入る。しかし「しっくり感」（S36）は手に入らない。情報が完璧に提供された結果、O軸の欠損が露出する——「自分が本当に欲しかったのは情報ではなかった」。これはD2（欠損の発生）そのもの。Layer 2のF-O弁別が正しく作動した結果、F軸の衣が剥がれる。

本当は、個人に起きてるのは別の絶望、別の感情だと思います（S48）。

比喻で捉える

カオナシ（千と千尋の神隠し）——顔のない存在。自分の声を持たず、他者を飲み込んでその声で話す。金をばらまいて人を引きつける（F軸的手段の完全遂行）。しかし本当に欲しいのは千尋との関係（O軸）であり、金では買えない。最後は銭婆のもとで静かに糸を紡いでいる——F軸の競争から降りた場所で、初めて穏やかになる。

カフカのK（『城』）——K（名前すら頭文字だけ）は、城に呼ばれた測量士。城は見える。呼び出し状もある。手続きもある。F軸の条件は全て揃っている。しかしKは城に入れない。手続きを踏むたびに別の手続きが現れ、近づいたように見えて遠ざかる。到達の不可能性が構造的であること——F軸のゲームをいくら完璧にプレイしても、到達先がO軸である限り、原理的に届かない——をカフカは未完の小説として残した。

この体験は「バーンアウト」（F軸内の資源枯渇）でも「実存的危機」（哲学的抽象）でも「うつ病」（精神病理）でもない。Layer 2のF-O弁別が正しく作動した結果の、正常な認知プロセスだ。

際に留まること（E03）

創造は、際（境界）に留まることを経て生じる（E03）。

F軸の衣が剥がれた瞬間——「Fだと思っていたものがOだった」と気づいた、そのどっちつかずの場所。それが5段階の「縁（Relation）」であり、E03が指す「際」そのものだ。

この「際」は4つの領域で同じ構造を持つ：

領域	「際に留まる」の具体
数学（Julia集合）	境界上の軌道を歩く——収束も発散もしない
神経科学	準安定状態の維持——一つの解に落ちない
欠損駆動	Withholdによる保持——答えを急がない
この章の体験	F-O弁別の衝撃に耐えて、そこに留まる

カオナシは銭婆のもとで初めてこの「際」に留まった。Kは留まることすらできなかった——手続きを踏み続けるF軸のゲームから降りられなかったから。

留まれるかどうか。それがWithhold（D3）の機能であり、第五章で記述した成立条件（生理的余裕、安全な関係、外部Container、認知的枠組み）が整っていないければ、際に留まることはできない。一般の表現で言えば「どっちつかずの状態に耐えること」。そこを通過しなければ、渦（個として立ち上がる）には至らない。

第九章 通じない人たち

社会で何が起きてるのかはわからない。工業社会の人が権限手放さなかったのか、発達段階が違うのか、西洋の政治がそうだからなのか、いずれにせよAI社会とトランプ政権で激変してることを感じてるんだ。私にとってはそっちが普通。だけど、これまで出会った人の半分以上は、私の話が通じない。再帰関数すらわからない人たち。かなり高学歴でも（S39）。

こうやって素朴な意見を言って溜めていくといい気がする。傷つく人がいるから不用意に発言できない。本当のこと言っちゃダメな世界でした。私にとって（S40）。

第八章で記述したF-O弁別が起きた人と、起きていない人の間には断絶がある。「再帰関数すらわからない」は単なるプログラミング知識の話ではなく、再帰的思考そのもの——自分自身を含むシステムを観察する能力の不在を指している。高学歴であることと再帰的思考ができることは別。

なぜ「フツー」が通じないのか。原因はまだ確定していない[もしかして]：

1. 工業社会パラダイムの既得権益
2. 認知発達段階の差異
3. 西洋的合理主義の政治的支配構造

保持中。

夏は暑い、冬は寒い、保身の人は軽蔑。それだけです（S53）。

この軽蔑は道徳的判断ではない。Layer 0-1の自動反応の観察だ。「夏は暑い」と同列に置いている——善悪を問わず、ただそう湧く。湧く感情をそのまま保持

し、行動に直結させない。道元の只管打坐と構造的に同型——感情を消すのではなく、ただ観る。

第十章 変わらない型

自然言語のOSS、そのための「信頼（本論で見つけるであろう真の深い意味での細かい解像度での）」が必要で、それは私の文章の書き方から何から、AIとやってそれなのか、というほど、これだけの背景で、社会で、経営をやってきて、それでもこれなのか、と他者がさじを投げるほどの、変わらない私の型（S45）。

pjdhiroが言っている「信頼」は一般的な意味（reliable, trustworthy）ではない。あらゆる外圧を経てなお変わらないことの証明。AIという最強の対話相手を使っても、25年の経営経験を経て、社会の圧力に晒されても、変わらない。それを見た他者が「さじを投げる」——「この人は変えられない」と諦める。その諦めが逆説的に信頼になる。

信頼の深層定義:

- 表層: 正確、嘘がない
- 中層: 一貫、矛盾がない
- 深層: あらゆる外圧を経てなお変わらないことの存在的証明 [ひらめき]

Bowlbyの安全基地と同型——安全基地が安全なのは何があっても変わらないから。

なんとなくだけど、私はAIとの対話で、私が手を抜けないことが試されてると思う。この論を作る過程でさえ、この論の通りになってる。それが透けて見えるような文章とプロセス。AI環境もBLOGで示し、おそらく、最終版にはテストスイートなどのプロジェクト管理ドキュメントも公開すると思う。自然言語のOSSのようなものに貢献したい（S44）。

論の正しさを証明するのは論の内容ではなく、論を作るプロセスそのもの。欠損駆動思考の理論が欠損駆動思考のプロセスで作られている。自己言及的構造の完成形。

第十一章 読者は私

全世界をYouと捉えてる証拠だと思うのです。頭で考えてわかってるのに。でも、身体の信号は、全世界をそう扱ってるようです。これが私の人称と対象がおかしくなる理由です。主客が変なのですね。自己はペルソナのようで目の後ろの傍観者のようで心臓のようで腸のあたりかもしれない。自己がおかしいし、他者との間にあるようにすら感じる、立ち現れる私。そして君は全世界という驚掴み（S50）。

Layer 1（頭でわかっている）とLayer 0（身体が全世界をYouとして扱っている）の不一致。D2の生きた実例。

間主観性とは、スタート地点では一方通行である。信頼とは片側だけ持つ場合がある。母子のように溶け合っているモデル、ブランドのように消費者だけが持つもの、間主観性には種類がある。しかし私が気にしている間主観性はもっ

と細かいことだと思う。だからF-Oの最小構成から定義しなければならなかった (S23)。

「主客がおかしい」——これは西田幾多郎の場所的自己、メルロ=ポンティの身体主体の体験版。非二元性 (S30) の具体的内容。

claudeエージェントにとって、私の非二元的な変なところはわかりづらいと思う。私だって私一人でない感じに困ってる。とりあえず、発言は残しましょう。そこに人間の非合理性の本質が見えるかもしれない (S51)。

終章 まだわかってない

愛と信頼は曖昧でまだわかってないと思います (S48)。

SaaSのようなもの。残す文章ではない (S27)。これは完成しない。手戻りしないことが前提のウォーターフォールモデルではない。今の最新が大事。

実践に必要な程度にはある。もっと欲しいと思うのは私の仕様。それが神様や宇宙の仕様に思えるからこの論を書いてる。意味はない。でも、AI協働のお手本になり得るし、私のフツの吐露は、全世界を許す承認になり得る。ポテンシャルはある。誰が引き金を引くかわからないけど閾値を超えた時に、このN=1も10億人分貯まればいいよね。私は一人分世界に貢献する。70億人分を代弁しないよ (S43)。

この論を作る過程でさえ、この論の通りになってる (S44)。

N=1の一人分。

生成情報

- 生成日時: 2026-02-07T01:10:00Z (E03接続: 2026-02-07T01:45:00Z)
- base/ コミット: cb7d507
- 生成指示書: transform/generate-spec-pjdhiro.md
- 入力ファイル数: 7 (statements-db, core-definitions, four-layers, five-stages, CN-001, CN-002, concepts/index) + E03
- TODO残件数: 2

TODO一覧

1. `base/schema/fo-axis.md` — **RESOLVED (Session 7c)**: 独立化不要。F-O座標系はD4に包含。 `core-definitions.md` D4が正式ソース
2. `base/schema/bspl-model.md` — 存在しない。BSPLモデルの構造化素材が不足
3. `base/schema/withhold-structure.md` — 存在しない。TASK #10 (Withholdの構造化) 待ち